
7 : 50に

義本和人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7：50に

【Nコード】

N8694Y

【作者名】

義本和人

【あらすじ】

峰垣ミクニ高校に通う三国友哉ユウヤと南雲茉希ナグモマキの学生生活の物語です。

1話（前書き）

舞台は自分が通っていた2004年まで通っていた高校イメージしていますので、独特なものとかがあるかもしれないですが、自分がかしいだろ、変ってたなと思うことは後書きに書いていきますが、気付かないでいるかもしれません。

学校の仕組みとかで「？」なことがあったら、そーゆー学校があるんだなと思ってください。

あと当時の学校のことなんで今はその学校の仕組みが変わっているかもしれません。

1話

階段を誰かが昇ってくる音が聞こえてきた。

珍しい。いつもなら8時過ぎまで誰かが登校してくることなどないのに。

時計を見るとまだ7時50分。いつもより15分ほど他の人が来るには早い。

この階で教室として使われているのはたった2部屋しかないが、それでも隣の教室の人かも。

と思っていると教室のドアが開く音がした。どうやら先ほどの階段を上ってくる音は

クラスメイトのものだったようだ。

「おはよ」誰が入って来たのかを確認するより先に声をかけた。

「お、おはよう」誰かが教室にいることは知っていたみたいだが、少し驚いたような声で返された。

「ひどいなあ、そんなに驚くことじゃないでしょ。挨拶くらいで」

入ってきたクラスメイトは自分の2つ前の席の女子。

話したことは無かったが、顔立ちと雰囲気から大人びた人かなという印象を持っていた。

確か名前は南雲……下の名前は覚えていなかったが、

南雲さん、という名字を知っていただけ、マシだろうと思っておく。

「そうだけどさあ、あれ、三国くん日直だったっけ？」

「いや、違うけど？というか日直は南雲さんのほうでしょ」

「あ、うん。ほら職員室に鍵取りに行ったらもうないし？日直が取りに来るもんだと思ってたしさあ」

「2日目からこのクラスの鍵、俺以外回収したことある人いないと思っよ」「

「え?」

「だって、いつもクラスで最初に来てるの俺だしさ」

「そうなの?」

「というか、8時前に誰かが来たのも、そうないよ。日直も平気で予鈴後だし、来るの」

「え、じゃあ何?あたし頑張っちゃった系?しかも無駄に」

「だねえ、てか別に鍵回収って日直の仕事じゃないんじゃない?」

「え〜。いつもより30分早く家出たのに」

「ありや、それはご愁傷様」気が合ったように二人は苦笑した。

「あゝあ、無駄しちゃったな」そういつて彼女は自分の席にカバンを置いた。

「かもねえ」仲がいいわけでもないし、そもそもちゃんと話したことがあったわけでもないの

話の切り上げ時かと思い、読みかけの教科書に再度目を向けた。

おそらく英語の時間に自分が当たることが予想されるところを予習するために。

「ねえ?」だが声をかけられた。どうやらまだ彼女の的には切り上げ時ではなかったようだ。

「ん?」教科書からは視線を外さず、耳だけは傾けることにした。

「いつもこんな朝早いのか?」

「そうだね、遅くても50分には来てるかな」

「早い時は?」

「半にはいるよ」どうしてもわからない単語があったので辞書に手を伸ばした。

だが、あると思っていた場所がない。なので視線は教科書から外さず手だけ動かし周りを探るが、見つかる前に机から手が落ちた。

あれ？と思ひ顔を上げると目の前に英和辞典を持った彼女がいた。

「南雲さん？」

「へえ、ちゃんと予習なんてしてるんだあ」多分意味は無いのだから、辞書をばらばらとめくりながら

彼女は言った。

「いや、今日たぶん当たるからさ。あのおっさん訳ちゃんと答えないとネチネチと煩いじゃん？」

「だよね、間違っただけで『前後の文読んでおかしいと何故あなたは思わなかったのです』とか、

マジメにやってきた生徒にいうセリフ？とかマジ思うもん」急に彼女がやった教師のモノマネは

なかなかのクオリティで、思わず嘖き出した。

「ヤバ、今の似てた」

「あ、似てた？似てた？？」

「うん、超似てた」

「やったね、今度みんなの前でもしよつと」自信に満ちた声で彼女は答えたが、

自分があまり笑いの沸点が高くない、いや正直かなり低いという自覚はあるのでさすがに

他の人に受けするかわからないので一応

「それは、滑っても俺は責任取らんよ？」とは言っておいた。

「え、なにそれ？」

「ま、念のためね」

そう、念のため。

「ひどい」そう口では言いながらも彼女は笑っている。

「ところでいつもは？」

「え？」急に話が変わった。もう彼女の中ではモノマネの話は完結したようだ。

「いつも勉強してるわけじゃないんでしょ？」

「ああ、いつもは本読んだり、ボーっとしたりかな」

「わざわざこんな早く来てまで？」

「別に早く来てたくて来てるんじゃないけどね」

「じゃあ、なんで？」

「一応ジモティーなんだけどチャリ通OK範囲外だからさ、歩いて来てんだけど」

朝遅いとあの大名行列ウザくて。じゃあそれができる前に来ればいいと思って、ね」

大名行列とは駅から学校まで人が絶えず、ずっと学生たちが登校している様子が

電車から見ると大名行列に見えるという風に揶揄されてきた、

この学校と地元の人間にしか通じない言葉だ。

「ホント、ウチのガッコ人多すぎだよね、あたしもあの中歩くのダルくて」

「あれ、南雲さんも徒歩？なら今日は朝来るの楽だったでしょ？」

「あ、そういえば全然人いなかった。てかジモティーて家どこ？」

どうやら今まで南雲さんという人を見た目から大人びていると勝手に思っていたが、

どうやら違ったようだ。

この子はかなり人懐っこい。平気で人の目を見て話してくるし、話を振ることも好きなようだ。

今まで会話をしたことのないクラスメイトに対してでも。

そういえば、いつの間に隣の席に座ったんだろうとかとも思いつつ

「駅の反対側にある生協の辺り、て分かる？」

「わかるわかる。峰中のあたりでしょ？あたしもジモティーだし」

「あや？そうなの？」

この学校はかなりのマンモス校だ。1学年900人ほどいるのだから

ら、私立とはいえ地元の間人が
他に通つていてもおかしくはない。

実際同じ中学から3人ここに通っている。ただ、そう地元の人に会うこともないとは思っていたので
少し驚いた。

「谷原中だったよ」彼女が口にしたのは隣の学区にある中学の名前
だった。

「住んでるの、谷原小との間だしね」続けて言われた小学校は自分
の家からも近所だ。

そのあたりの地理を思い出せば、

「え、何。南雲さん家って家から5、600メートルのところで
と??？」

「そんなもんかな?キグ〜」

「いや、まあ奇遇つちやそうだけどさ。」少し間をおいて

「はあ、まさか学校が違ったとはいえ、そんなご近所さんにクラス
メイトがいたとは」これには流石に
驚嘆した。

「だよ。ビックリだよ」

その言葉の割に彼女があっけらかんと、陽気と笑って見えるのはそ
ういった性格だからだろう。

その後もおしゃべりは続き、いつもどこで遊んでいるのかといえ
ば、自分は地元か隣駅と答えたが、
彼女はターミナル駅のほうまで行っていると言った。

地元から5駅で片道160円ほどなので確かに遠くないが、毎週末
となると思ったが、そんなに
しょっちゅう遊びには行かないそう
で月1、行っても月2程度だ
という。

「なるほどね」時計に目をやれば8時5分過ぎだった。その目線
に気付いたのだろう

「ほんと誰も来ないんだね」と彼女は言った。

「ん〜、早い人はそろそろ来る時間だけど」
「ど?」

「まあ、わざわざ早く来るメリットがないからねえ」

「そう?朝あの道が空いてるって結構いい感じだったけど?」

「早く来ない人は、もともと空いてる道知らないからなあ、それに早く起きるってデメリットに

比べたら、ねえ?」

「あゝ、確かに。ところで三国君は何時に起きてるの?」

「六時半」

「早!」

「て言っても南雲さんだつて起きるの7時とかでしょ?それなら大差なくね?」

「そうだけどさあ。朝の30分で、結構違くない?」

「まあ、確かに。けどその時間に起きるの慣れたしそれに電車通学の人なら同じくらいに

起きてるでしょ」

「山路君だつて、うちのクラスで一番遠いの?」

「たぶんね。電車に一時乗ってる、言ってたし」

「あわ、うちってわざわざ来る場所?そこまでして」

「この辺私立少ないから。学区によって仕方なくなんじゃない?」

「そっか、そうだったこともあるのか」

「その辺は当人に聞かんと何とも言えんけどね」と言っておいが実際聞いたことがないので

何とも言えない。

調度話が止まったところで女子が入って来た。最初のほうに来ることが多い木下さんだ。

自分も南雲さんも挨拶をしたが、返事もなくすぐカバンを置いて教室を出て行った。いつものことだ。

「あれ?木下さんどこ行ったの?」

「他のクラスじゃないかな。いつも来たらずぐ出て行って予鈴まで戻ってこないし」

「へえ」動向が気になるのか、彼女は背筋を伸ばしてもう教室からは出て行って姿の見えないクラスメイトの姿を追った。

プリーリードッグに似てる。その姿を見て思ったが決して口に出してはいけないというくらいの分別はある、流石に。

調度木下さんが登校してきたのが呼び水になったのか、そこからクラスメイトが、続々登校してきた。

「ゆかり、おはよ」15分になったころ、いつも南雲さんが一緒にいる福田さんが登校してきた。

「はよ、て早いじゃん、いつもあたしより遅いのに」と自分の席を通り過ぎ福田さんは南雲さんのところに寄ってきた。

「そうそう聞いてよ、ゆかり。今日あたし日直だったから早く来たんだけど」

「あ、今日日直なんだ」

「そうそう、そうなの。で、50分に来たらさもう先に来てる人いたの、誰だと思う？」

「え、三国君でしょ」福田さんは間髪もおかず答えた。

「へ？なんでゆかり知ってるの??」

「なんでも何もうちのクラスの常識じゃない？三国君が最初にいるの。てまさか茉希知らなかったの？」

へえ、常識扱いされてるんだ、俺が最初にいるの。てか南雲さんの名前「まき」というんだ。

というかこのやり取り自分の前でやるんだ。

とか考えていると、しよげてるのか俯いている南雲さんが目に入った。

「常識だったんだ。このクラスの。あたし知らなかったわあ」

「まあ、もう知ったんだし。常識って言っても、ほら日直でちょっと早く来た人たちが知って、

それを他の人に伝えてたから、知ってる人もいるて感じなだけだし。常識っていうのも

あたしがちよつと大げさに言っただけだから」福田さんがフォローを始めた。

自分のことだし、福田さんの手助けをしようかと思っただが、俯いていた南雲さんに目を向けると

口元が上がっているのが見えた。立っている福田さんからは見えな
いだろうから、

この場合必死な福田さんを見ているほうが面白いと考えをしばらく口を出すのをやめた。

しばらくはフォローをしていた福田さんだったが、しまいには教えていなかった自分が悪かった、

とまで言い出したので流石に哀れになって来たし、南雲さんの肩が震えだしてるので

福田さんに助け舟を出すことにした。

「福田さんはいい人だなあ」

「でしょう、ゆかりってマジでチョーいい子なの。最高でしょう」「じゃあ、あんまりからかわないほうがいいんじゃない」

「最初はそんなつもりじゃなかったんだけど、必死にフォローしてくれただから、つい」

「さいですか」満面の笑みを浮かべ、福田さんを褒めちぎる南雲さんに対し、驚き、

展開についていけない福田さんだったが状況を理解したのか、大きなため息をはいた。

「なにそれ」

「ごめんね、ゆかり」

「ホントなにそれ」そう言って、結局福田さんも笑い出した。

ひとしきり笑い終えたところで

「けど珍しくない？ 茉希が三国君が喋ってるなんて」と福田さんが聞いてきた。

「早く来ちゃって、やることもなかったら思わず話しかけちゃった」

「三国君に迷惑かけてない？ 茉希たまに失礼なことあんまり知らない人にも聞いちゃうんだから」

「え、と。大丈夫だったよね？ 三国君。あたし迷惑かけた？」

「いや、そんなことは。楽しかったし」本心からそう答えた。確かに独特のテンポはあって

戸惑った瞬間はあったが、迷惑と感ずることはなかった。

「ほら、ゆかり。大丈夫だって。てかあたしそんな迷惑なこと聞かないよ」

「本当？ 優しくしないでホントのこと言っていないんだからね？」

「全然なかったよ。ただ」

「え、あたし何かした」驚愕、という表情を南雲さんはした。なので、手元に視線を向けて一言だけ

「辞書」と言った。話はじめて20分になろうとしているが、彼女はの間ずっと

英和辞典を手に行っていた。

「あ、ごめんごめん」彼女が返してくれた辞書はずっと持っていたからだろう。少し温かくなっていた。

「もう、何してるの」福田さんから小言を言われていたが、その間に調べたかった単語を調べた。

「こんなもんかな」その単語さえわかれば予習も問題ない程度まで進んだのでノートを閉じた。

「勉強の邪魔しちやっごめんね」南雲さんはそう謝ってきたが、

「そんな、楽しかったし気にしないで。いつも朝は暇してるだけなんだし」笑みを浮かべながら

そう言って手を振った。

「うん、あたしも楽しかった」南雲さんはそう言っただけで、その視線の先に目を向けると

隣の席の原田さんが登校してきているのが見えた。

席に荷物を置く邪魔になると察したのだろう。

「じゃあ、今日も一日頑張っただけね」

「うん、南雲さんこそ」と声をかけるとすぐその場を二人は移動をはじめ原田さんとのすれ違いざまに

一言二言何か話をしていった。

たぶん席を借りたことでも言っていたのだろう。そのまま二人は南雲さんの席に移動して

話を続けていた。

なんだかいつもとは、ずいぶん違う一日の始まりだ。

いつもなら登校してきた人に挨拶をするというくらいしかないのに、こんなに誰かと朝から話すのはなかなか面白い。

何せいつもダベっているのは予鈴がなるころに登校するような男なのだから。

だから今日は特別なんだろう。

とりあえず何人かツルんでいるメンツも登校してきていたので、そちらに移動して予鈴までの時間を

くだらない話で盛り上がった。

そして、その日は予想通りの場所が英語で当てられたので特に困ることもなく授業は進み、

一日が終わった。

翌日、いつものように7時半ごろ登校をし、特にやることもないの

で小説を読んで過ごしていると、階段を誰かが昇ってくる音がする。

読み始めた時間とペース的にそんな時間じゃないだろうと思って教室の時計に目を向ければ、

まだ7時50分。

まさかと思って、ドアに目を向けたまま待っているといるとドアが開いた。

「おはよう」朝一番に聞けば元気が出そうなのはつらつな声が聞こえ、入って来たのは

先ほどまさかと思った南雲さんだった。

1話（後書き）

早速ですが、この学校は全部屋鍵がかかっていたので、教室へ自由に立ち入りできませんでした。朝は教室に鍵を取りに行き。放課後は4時くらいには担任の先生が鍵閉めました。早いクラスだと掃除終わったとたんに占めてたと思います。なんで忘れ物しただけで職員室に行く羽目なるのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8694y/>

7:50に

2011年11月26日01時51分発行